

わが国の最近 1 年間における教育心理学の研究動向と展望

発 達 部 門 (乳・幼児)

乳幼児期の社会情動的発達研究の動向を探る

一人とのかかわりと自他理解を中心にして—

松 永 あけみ

(群馬大学)

I. はじめに

本稿では、日本の乳幼児期を対象としたこの 1 年間の発達研究を概観し、その動向と展望を考察する。しかし、今年 1 年を概観するだけでは動向を浮き彫りにすることは難しい。そこで、初めにわが国の過去の発達研究の大枠での流れを概観しつつ、その流れの中で今年度の研究動向を考察したい。そのための方法として、これまでの教育心理学年報を読み返してみた。教育心理学年報において、最近 1 年間の研究動向を概観するという形式になったのは、1986年度からであった。その後の年報で指摘されてきた点を辿ってみると、2002年度の年報(荻野)の冒頭に「発達研究が何を問題とし、どのようにアプローチしているのかに対する問い直しがなされているように思う」と記述されているが、まさに、発達研究の目的とその方法論に関する問いが一貫してなされてきているように思う。

発達研究の目的に関しては、種々の発達現象を時間軸にそってその変化のプロセスの様相を明らかにすることをめざす研究と発達メカニズムの解明をめざす研究とが考えられる。そして、前者に比べ後者を真正面からめざす研究が少ないことが指摘されている(遠藤, 1998; 荻野, 2003)。

方法論に関しては、1986年度の年報(飯島)で生態学的研究の重要性が指摘されている。続いて、次年度の年報(中島)においては、生活の場での子どもの姿を捉えることの重要性が指摘され、同時に、子どもの姿をきめ細かく観察するという観察研究と実験的研究とが両輪になって相補的に進められるべきだと述べられている。さらに、1991年度の年報(佐々木)では観察法について観察者側の主眼の成熟度に基づく客観性の追求が問題になり始めたことと記述され、生きた子どもの姿の観察法の在り方が本格的に検討され始めたことが窺える。また、1993年度年報(麻生)では、状況の中で生きている姿を標本として殺してしまうことなく生かしたままでどのように対象化して研究していけるかが重要な課題であると指摘されている。

その後の年報においても、文化・文脈的な視点を取り入れることの重要性が指摘される(園田, 2000)など、社会文化的影響が埋め込まれている現実の日常生活の中で生きる子どもの姿を捉えることの重要性が強調され、同時に横断的にしろ縦断的にしろ自然場面での観察研究、さらには事例研究や質的研究が増加してきているように思う。これに対して2001年度の年報(岩立)では、主流に流されず目的の解明にむけて常に方法を問い直していく必要性が指摘されている。

方法論に関しては、もう一点特筆すべき点がある。それは、上記の点とも関連するが、発達における「関係性」への視点の導入である。1994年度の年報(久世)で初めて関係発達論や間主観性について触れられ、続いて1996年度(高橋)および1997年度(遠藤)ではタイトルに関係性という用語が使用されるなど、関係性が発達研究におけるキーワードになってきていることが窺える。しかし、両年度では、関係性に迫っている研究の少なさが指摘されている。そして、2001年度の年報(岩立)においては、人間の関係論的な理解が発達心理学の領域に深く根ざしてはきたが、関係性を捉える方法論の検討が必要であると指摘されている。

以上のように発達研究の目的である発達の变化のプロセスとメカニズムの解明のために、方法論としては社会文化的文脈を背景にして、日常生活において他者との関係性の中で発達し生きる子どもの姿をいかに捉え、そして、それをそのまま研究の対象としてどのように生かしていくかが今日の発達研究において重要な課題になっていると考えられる。以下では、これらの点を踏まえながら、さらに、新しい動向を探索しつつ、この 1 年の発達研究を概観していく。

なお、ここでは、2002年 7 月～2003年 6 月までに刊行された教育心理学研究、発達心理学研究、心理学研究という 3 つの学会誌に掲載された研究論文を中心に取り上げ、それとの関連で、その間に開かれた日本心理学会第 66 回大会、日本発達心理学会第 14 回大会、および 2003 年

8月に開かれた日本教育心理学会第45回総会での研究発表を取り上げる。また、全ての領域をカバーすることは困難であるので、例年にならない概観する領域を筆者の関心と昨年度の年報で取り上げられている領域(運動・認知・言語発達の動向)との関連で、他者とのかかわりと自他の理解を中心として、社会情動的発達研究について概観していく。

II. 発達を生み出す他者とのかかわり

(1) 大人とのかかわり

① 養育者の主観的読み取りによるかかわり

他者とのかかわりは、妊婦の胎児への意味づけにより、すでに胎児期から開始されるとみることができる。

岡本・菅野・根ヶ山(2003)は、胎児が自発的に動き、妊婦がその胎動を感じ、それについて語ることを胎児とのやりとりと捉えている。そして、胎動についての妊婦の語りを胎児への意味づけと捉え、妊婦からみた主観的な母子関係の変化を検討している。具体的には、胎動についての日記を初産妊婦より得て、この日記における胎児のからだや内的状態などの語りを分析している。その結果、2つのターニング・ポイントが見出されている。第1のターニング・ポイントは、妊娠29～30週で、胎児の足についての語りが急増し、それ以前の間人以外のものとしての胎児の見方が減少する時期である。つまり、妊婦が、胎児を人間の赤ちゃんとして思えるようになる時期である。第2のターニング・ポイントは、妊娠33～34週で、胎児の内的状態への言及が増加し、胎動を人間の赤ちゃんにふさわしい感情や胎児の発話と意味づける語りがみられ、さらに、母親や他の人に反応したり応答したりしているとも意味づけられている。これは、母親が胎動を胎児の主体的行動として捉え、胎児をやりとりの相手として位置づけていることを示すものであり、妊娠中から母親による主観的な母子関係が築かれ始めているであろうと指摘している。

大人側の胎児に対する意志を持った主体的存在としての捉えがやりとりの始まりであり、ともに育つ存在としての発達にとって重要なかかわりの始まりではないかと考えられる。

神谷(2002)は、男子学生、新婚の男性、初妊婦、父親を対象に、2種の乳児の泣き声のテープ刺激を呈示して、乳児の泣き声をどのように知覚し、泣き声に対する認知的枠組みをもっているかを検討している。その結果、初妊婦、父親は乳児の泣き声を持つ火急性的の高低を手がかりとした認知的枠組みを形成していることを示唆している。妊娠、育児という生活を通して男性も早期に育児に関するコンピテンスを持ちうることを示唆されたと述べ

ている。

このような大人側の子どもへの行為に対する主観的な読みとりが、子どもとのやりとりや発達にとって重要であるという視点からの研究が、大会発表においてもいくつみられる。

Meins(1997)は、養育者が乳児を早期から心を持つ存在として捉え、その主観的状态を読みとることが子どもの発達を支え促進する役割を持つと考え、子どもを心的観点から理解しようとする養育者の傾向を〈mind-mindedness〉とよんでいる。篠原・遠藤(2003a, b)は、養育者が有する個人的特性としての〈mind-mindedness〉の測度開発の試みや〈mind-mindedness〉の高低と乳児との言語的相互作用の在り方との関連に関する予備的検討を行っている。そして、予備段階ではあるが、〈mind-mindedness〉に個人差が存在することやその個人差は実際の母子相互作用場面における乳児の主観的状态の言及に、頻度、内容の両側面で関連することを示唆している。

野口・無藤(2003)は、集団保育場面での保育者の幼児の活動や行為に対する読み取りと実践行動との関連に注目し、保育者の持つ暗黙の信念体系によって、子ども同士の拒否発生場面での対応が異なることを示唆している。

以上の研究は、直接、乳幼児の発達を扱ってはいない。しかし、大人側の主観的読みとりは、子とのやりとりに反映され、そこに固有の関係性が生起し、子どもの発達にとって重要な意味を持つと考えられる。

② 〈相互作用〉としてのかかわり

坂上(2002)は、親子を双方が互いに影響を及ぼし合う統合された一つのシステムとして捉えている。そして、子どもの自律性の発達の問題を親子システムの発達の問題として考え、母子の共変化の過程を検討している。具体的には、モデル構成的現場心理学の方法論(山田, 1986)を適用し、一組の母子を子どもが15ヶ月から27ヶ月齢の約1年間の日常生活場面の観察を行い、両者の葛藤的やりとりの縦断的变化を検討している。観察事例の詳細な質的分析と量的分析により、3つの時期を抽出している。I期は、母親から子への行為の社会的意味(行為の是非や謝罪・修復の必要性)伝達と、子による行為の社会的意味の模索の時期、II期は、子による行為の社会的意味の取り入れと、子と母親の間での行為の社会的意味の共有の時期、III期は、子に叱責や非難に対する怒りに関連した行動と罪悪感に関連した行動(自発的謝罪)の両方がみられるなどの情動反応に分化がみられ、母親と子との間で意図や心理的、物理的距離の相互調整がみられるようになる時期である。そして、このような結果から、この時期に生じる母子間の葛藤的やりとりの再組織化、そしてそれを通

して成し遂げられるであろう母子の関係性の再編は、子どもの情動の分化と知的な理解、母親の対応の変化という三者の足並みが揃うことによって可能になるであろうことを示唆している。

このように大人と子どものやりとりを一つのシステムと捉え、相互作用を分析している研究は、大会発表の中にもいくつかみられる。

川田・川田・塚田 (2003) も初期の negativism (Wenar, 1982) に関する子どもの行動およびそれに対する母親の対処行動を観察し、両者の発達的变化を検討している。母子8組を対象に食事場面を選択して、生後5ヶ月～24ヶ月まで月1回のペースで観察を行い、子どもの自己主張がより明確になるにつれ、母親の行動も変容していくことを示している。そして、こうした共変化が、養育者と子どもの新しい関係を創出し、子どもの健全な自我発達に寄与するものと思われると述べている。

濱崎 (2003) は子どもの自己主張的ふるまいが生じる背景を検討するために、母子の遊び場面を観察し、どのように子どもの要求／拒否行動が生じ、それが母親にどのような認識を与え、母子の関係に変化をもたらすかを検討している。また、外山 (2003) は、家庭での日常的な場面での母子相互交渉を取り上げて、食事場面への母子の協同的参加の検討を行っている。

以上のような研究では、大人と子どもとのかかわりを一つのシステムと捉え、共変化の過程を分析している。人とかかわりを通して発達していくと考えた場合、他者との共変化の過程が発達の過程であり、また、この共変化の過程を、個人差にこだわりながら、丁寧にかつ詳細に分析することにより、発達のメカニズムも見えてくるのではないだろうか。

③ おとな側の働きかけに焦点化したかかわり

金・仲 (2002) は、親が子どもから過去の体験や出来事をどのように引き出すかが、子どもの自伝的記憶やナラティブスキルの形成に影響を及ぼすと考え、中国の3, 4, 5歳児とその父母を対象として、過去の出来事をめぐる対話において、子どもの発達に伴い親がどのように発話を変化させるかを検討している。その結果、低年齢児の親は高年齢児の親に比べて、発話量、yes-no や what 質問、さらに復唱質問などが多く、連続質問をすることにより出来事の基本情報を引き出していることを示している。そして、子どもはこのような働きかけを足場として、出来事の何を記憶しどう語ればよいかを学んでいくであろうと指摘している。また、父母間に差が見られ、父親は母親に比べ、発話量、および、復唱質問や命令文、さらに確認やしつけが多い等の差が見出されている。この差は何に起因するのかは明らかではないが、子どもは

この差に接することにより、語る相手によって求められる情報や語り口が異なることを学んでいくのでであろうと指摘されている。

金ら (2002) の研究は、子どもの発達とともに親のかかわりも変化し、その変化しつつある親のかかわりが子どもの発達に影響を及ぼすという視点に基づく研究として位置づけることができる。大人側の変化には焦点は向けられてはいないが、子どもの何らかの発達を指標として、親の接し方や養育態度の子どもの発達への影響を検討している研究が大会発表では非常に多い。このような視点での研究は、古くからなされ、今後も継続していく研究であろう。このような研究に、子ども側・大人側の個性や時系列的変化、さらには両者の関係性の変化をどのように組み込んでいくかが今後の課題ではないだろうか。

④ 愛着関係

子どもたちは、親とのかかわりを中心とした家庭から、保育所や幼稚園などへと生活の場を拡げていく。そして、徐々に、子ども同士のかかわりが比重を占めるようになる。この親とのかかわりから子ども同士のかかわりに至る過程には、子どもが心身ともに親、主に母親から離れるいわゆる母子分離の成立が重要な課題となる。

尾崎 (2003) は、愛着の安定性と子どもの気質が仲間集団に参加する際の母子分離に及ぼす影響を検討している。親子教室に通う2, 3歳児の母子101組を対象に、1年間の観察を実施している。そして、そこに通う様子から、母子分離の型を過分離型 (1年を通して母子分離をしていた)、徐々分離型 (次第に母子分離をしていった)、一定分離型 (母子分離できたりできなかったりで、一貫した傾向なし)、不分離型 (1年を通して分離困難) の四つに分類している。そして、それらの型と愛着の安定性(Qソート法)および子どもの気質との関連を調べている。その結果、母子分離の様相が異なる過分離型と不分離型で愛着の安定性が低い、過分離型の子どもは新奇場面でしり込みをしないのに対して、不分離型の子どもは新奇場面にしり込みし順応性が低い。一方、新奇場面にしり込みをしても、愛着の安定性が高い徐々分離型の子どもは、次第に母子分離がみられるようになることが見出されている。これらより、2, 3歳児が仲間集団に参加する際の母子分離は、愛着の安定性と子どもの気質が相互に関係して特徴づけられることが示唆されている。

桂田 (2003) も幼児の気質、愛着、攻撃性と母親のストレス、養育行動との関連を検討している。

これらの研究では、愛着関係を単独に扱うのではなく、子どもの気質など他の要因との関連性の中で、愛着を一つの影響要因として捉え検討している。また、近年、愛着と子どもの社会情動的発達との関連だけでなく、子ど

ものの社会認知的発達との関連なども検討されている (Meins, 1997)。このように、幼児期の発達研究において、発達への一つの影響要因として愛着関係が様々な研究において扱われることが増えてくる可能性が示唆される。しかし、わが国における幼児の愛着研究においては、Qソート法による測定が中心である。山川・高橋 (2002) が、図版を用いて、幼児の愛着を表象によって測定する試みを行っているが、今後、このような日本文化に適した幼児や児童の愛着の測定法の開発がますます必要となってくるであろう。

(2) 子ども同士のかかわり

① 社会的葛藤場面でのやりとり

a. 攻撃行動

攻撃行動は、子どもの社会情動的発達に重要な影響を及ぼすといわれ、多くの研究がなされてきている。攻撃行動は仲間から拒否される主要な要因となり、攻撃的な子どもは協調的な仲間関係を築きにくいといわれている (Coie, Dodge, & Kupersmidt, 1990/1996) が、これまでの研究では主に男児を中心に扱われてきた。しかし, Crick & Grotpeter (1995) は、女児の攻撃性にも注目している。そして、他の子どもを排除したり無視したりするなど仲間関係を操作することによって相手を傷つけることを意図した攻撃行動を関係性攻撃とし、直接的攻撃 (相手を叩いたり蹴ったり、言語的に脅かすなどして相手を傷つける) と区別して、児童期において男児よりも女児に関係性攻撃が多いことを報告している。今年度は、この関係性攻撃に着目した研究がみられている。

畠山・山崎 (2002) は、幼児の日常場面で生じる攻撃行動を観察し、攻撃行動のタイプや、攻撃行動のタイプと攻撃する側および攻撃される側の性別や仲間内地位等を明らかにし、幼児の攻撃行動の実態を検討している。観察対象は幼稚園年長児の1クラス (男児16名、女児18名)、観察期間は年度の初めから終わりまでの1年間で、週3～4日の割合で登園時からの約2時間の観察を行っている。観察記録は、フィールドノートによる。その結果、160の攻撃事例が観察され、攻撃のタイプとして直接的・道具的攻撃、直接的一脅し攻撃、関係性攻撃がみられている。そして、直接的攻撃行動は2タイプとも女児に比べ男児に多く見られ、関係性攻撃は女児に多く見られている。さらに、女児における関係性攻撃は、核となる子どもが他の地位の子どもと比較して最も多く行い、孤立児がその被害を最も多く受けていたことが示されている。特に、本研究では、特定の子どもの被害者となっているなどの特徴が報告されている。

関係性攻撃を示す子どもたちは、どのような特徴があ

るのだろうか。磯部・佐藤 (2003) は、関係性攻撃を示す幼児の社会的スキルの特徴を検討している。9つの幼稚園および保育所に所属する保育者に、担当クラスの幼児 (年中児161名、年長児202名) の行動評定を依頼し、その評定をもとに分析している。その結果、関係性攻撃群、身体的攻撃群、両高群、両低群の4群を選出し、これら4群の子どもの社会的スキルの特徴を見出している。関係性攻撃を高く示す子ども (関係性攻撃群・両高群) は、規律性スキルに欠けるが、その他の友情形成スキルや主張スキル等の社会的スキルは比較的優れていること、また、関係性攻撃群は、教師に対して良好な社会的スキルを用いていることが示されている。さらに、性差がみられ、女児の関係性攻撃群は、友情形成スキル (ゲームや集団活動への参加、自由時間の過ごし方) が一部欠けていることが示されている。そして、総じて、関係性攻撃を多く示す子どもは、特に規律性スキル (いざこざ場面で自分の気持ちをコントロールする、ゲームをする時にルールに従うなど) に欠ける特徴が見出されている。さらに、磯部 (2003) は、関係性攻撃を示す女児の仲間関係の特徴の解明へと研究を進めている。また、畠山・磯部・越中・蔡 (2003) は、関係性攻撃による被害者の行動特徴を検討し、関係性攻撃を受けることが多い子は、孤独感が高い傾向にあることなどを示唆している。

関係性攻撃を子どもたちがどの程度深刻に受け止めているか、また、それに対して大人がどのようにかかわるかは、非常に重要な問題である。特に、5～6歳頃になると仲間関係も複雑化していくであろう。それゆえ、関係性攻撃の実態を、クラスの具体的な人間関係に踏み込んで調査していくとともに、第三者的視点からの研究ではなく、保育実践への関与を視野に入れた研究が必要であろう。

b. 社会的葛藤場面における情動

社会的葛藤場面には何らかの情動が生起し、時には情動表出が見られるはずであるし、その表出を受けて、さらなるやりとりが展開されていくであろう。

森田 (2003) は、他者のネガティブな情動表出の対処方略への影響を、年中児・年長児を対象にして実験的に調べている。ネガティブ感情の表出として怒りと悲しみを比較している。他者の欲求に焦点化した対処方略 (貸してあげる、ごめんねというなど) は悲しみの表出に対して多く、自己の欲求に焦点化した対処方略 (だめ、貸してあげないなど) は、特に女児において怒りの表出に対して多いことが報告されている。これらより、幼児においても、他者の異なる情動表出が、その送り出すシグナルに応じた形で対処に影響することが示唆される。

実際の子ども同士の社会的葛藤場面での子どもの情動

とその影響に関する研究は、今年度の研究発表には見あたらなかった。しかし、他者とのやりとりにおいて、特に、社会的葛藤場面においては、互いの情動が強く反映され、その情動のゆくえが、そこでのやりとりを方向づける可能性がある。それゆえ、互いの情動の変化を視野に入れた研究が待たれる。

c. 幼児のストレスとレジリエンス

保育園や幼稚園などでの仲間とのかかわりは、幼児期の社会情動的発達にとって重要な経験である。そして、重要であると同時に、子どもたちは仲間とのかかわりの中で何らかのストレスを感じている可能性がある。これまで、日常場面における仲間関係などのストレスは、児童期以降で扱われることが多く、幼児期においてはあまり検討されてこなかった。

高辻 (2002) は、幼児の園生活における仲間関係を中心とした日常的ストレスを対象としている。そして、そうしたストレスに対してより適応的に振る舞うことができる子どもの特徴を示す概念として「レジリエンス」に注目し、幼児にとってストレスフルと思われる対人場面での内面や行動の柔軟さをレジリエンスと捉えて、保育者評定用のレジリエンス尺度の作成を試みている。

小花和W (2003) は、生活場面一般における幼児のレジリエンスに関する母親および幼稚園教諭の評価を比較し、幼児自身の意識との関連を検討している。

レジリエンスという視点からではないが、小林 (2003) は、幼稚園における幼児のストレス対処行動の個人差について検討し、教師評定により子どもによってサポートを求める子、一人で対処する子など様々なタイプの子どものがいることを見出している。また、宮塚 (2003) も、幼児の幼稚園生活場面でのストレスに着目し、教師評定による幼児用ストレス反応尺度の作成に着手している。

幼児期のストレスをどのように解釈し、捉えるかは難しい問題ではあるが、ストレスとレジリエンスは、子どもの社会適応において重要な概念であろう。レジリエンスと社会的スキルや社会的コンピテンスなどとの相異点も含めて、レジリエンス研究の今後の展開が期待される。

d. 共同意思決定場面

他者との相互作用は、自己と他者の認識の形成にとって欠くことのできない要素であろう。さらに、子ども同士のかかわりは、おとなとのかかわりに比べ、基本的には並列関係から成り立ち、それゆえ、相互の意見対立やその意見の調整において、互いに自由なやりとりが生じやすいのではないだろうか。この意味において、子ども同士のかかわりは、他者と自己の分化と形成において重要な相互作用であると考えられる。

礪波・三好・麻生 (2002) は、自己と他者の相互作用を

広い意味での自己と他者の対話の過程と捉えている。そして、相互作用場面には目の前に存在する現実の他者と自己との対話に加え、個々人の発話の中に、内なる他者(あるいは第二の自己)と自己との対話が存在するとし、子どもたちは現実の他者との相互作用を通じて、「外側の対話」と「内側の対話」とを発展させ、そのことにより複雑化した「自己」と「他者」とを形作っていくと考えている。そして、このような考えの基に、幼児同士の共同意思決定場面での相互作用を詳細に分析し、そこで生じる対話構造を検討している。具体的には、幼稚園児に二人一組で、段ボールで作ったロケット模型に入ってもらい、そこからいつ出るかの相談を巡る子ども同士のやりとりを分析し、子どもたちの自分の意思というものがどのように形成され、他者の意思というものがどのように認識されるのかを検討している。その結果、両者の意見が一致しても必ずしも最終的な共同意思になるとは限らず、やりとりの中で子どもたちは意見を変容させたりしていることが多くみられ、幼児の意思は変わり易く、他者とのやりとりの「場」の中で揺らぎながら生成されていくことが見出されている。そして、共同意思決定場面において、個人の意志は個人内で決定されるのではなく、他者との対話的「場」の中で揺らぎながら生成されていくものであることを示唆している。さらに、礪波 (2003) は、共同意思決定過程の年齢にともなう発達的变化の検討へと研究を展開させている。

大人とのかかわりと同様に、子ども同士のかかわりにおいても、そこで生じる相互作用をある視点を持って詳細に分析することにより、子ども同士固有の関係性が見えてくるであろう。そして、子ども同士のかかわり独自の発達の意味と大人とのかかわりからでは捉えられない何らかの発達のメカニズム解明への示唆が得られるのではないだろうか。

② コミュニケーション・スキル

子ども同士のかかわりの一側面を担うものとして、子どもの持つコミュニケーション・スキルがある。

姜 (2003) は、引込み思案傾向や攻撃性傾向、さらに社会的コンピテンスが高いといった社会的行動特徴を持つ幼児が、どのような特徴的な応答スキルを持つのかを検討している。幼稚園の教師評定により上記の社会的行動特徴を持つ子どもを特定し、コンピテンスの高い群、攻撃性の高い群、引込み思案傾向の高い群の3群に分けている。そして、各群の子どもそれぞれ1名ずつの三人一組にして、うち二人が先に遊び、後にもう一人が加入して遊ぶという場面を設定し、そこで子ども同士の相互作用を分析している。その結果、引込み思案群の子どもは、ホスト場面やフィードバックにおいて、他群

の子どもに比べ言語率が低く、これらの場面での消極性が示唆されている。攻撃性群の子どもは、全体的フィードバック量や質問への適切な回答、受諾率の平均が他群に比べ低く、また、エントリー場面での要求への返答の仕方でも他群の子どもに比べ非言語的である傾向が見出されている。

子ども同士のかかわりに関する研究は、大会発表では実に多くのテーマが取り上げられている。しかし、仲間関係の形成に焦点をあてている研究(本郷・杉村・高橋, 2003)もあるが、その多くが、子ども同士のかかわりの様相に焦点化している。親子関係の場合、すでにそこに親子が存在し、その中で関係が築かれていく。しかし、幼稚園や保育園での子ども同士の場合は、選択的に仲間関係が形成されていく。子ども同士のかかわりそれ自体だけでなく、仲間関係の形成過程を分析することにより、他者との関係がどのように築かれ、そこでの関係性が互いの発達にどのような影響を及ぼしあうのかを明らかにすることができるであろう。そして、それが、子ども同士のかかわりの中で、何がどのように発達していくのかの解明につながるのではないだろうか。

III. 他者理解と自己理解

① 意図的 agents としての人の理解

人は、物とは異なり、目に見えない心的世界を持つ。心的世界の存在の認識を基盤として、人一般が持つであろう心の理解へ、そして、特定の他者の理解へと進んでいくのであろう。

いつ頃から物とは異なる存在として、人を認識するのであろうか。Kosugi & Fujita (2002) は、8ヶ月児が自発運動をする対象が人か物によって異なる因果性の認識ができることを示している。そして、さらに、Kosugi, Ishida, & Fujita (2003) では、10ヶ月児が人と物の動きの原因を不可視条件で推論できるかどうかを調べている。物(ボール)および人の後の一部が衝立で隠されており、つまり原因が目に見えない状態でボールおよび人が動き出す。その後、衝立がとられ、人の手がボールを押している場面、人の手がボールと離れている場面、何の agent も存在しない場面を呈示し、その際の乳児の注視時間を調べている。その結果、人に対しては3場面間で注視時間に差はないが、ボールにおいてはボールが手に押されている場面以最も短い注視時間であった。これより、10ヶ月児は物(ボール)が動き始めたのを見た時、ある agent の存在を推論しているが、人については外的原因を必ずしも推論しないことが示唆される。つまり、10ヶ月頃には、物とは異なる自発運動をする存在としての人の概念を構成していると考えられる。

② 注意の共有 (joint attention)

由井 (2002) は、幼児において登場人物の意図情報が物語理解における作業記憶容量の限界を補うことを明らかにしている。つまり、人の意図や欲求と行為との結びつきによる推論は、幼児の物語理解において有効に働くことが推察できる。このような他者の意図は、いつ頃から理解でき始めるのだろうか。

他者が注意を向けている対象に注意を向け、注意を共有することは、互いの認識世界を共有することであり、他者の意図の理解の発達にとって重要な一つの指標と考えられる。

田中・黒木・税田・大神 (2003) は、共同注意行動の出現時期を大標本による通過率から検討している。1588名の乳幼児を対象に生後8ヶ月から18ヶ月まで2ヶ月毎に計6回、郵送による質問紙調査を実施し、対象児の養育者に質問紙への回答を依頼している。共同注意関連項目の50%通過率を算出し、その結果、共同注意行動の発達に関して、他者の注意対象へ自らの注意を焦点づける応答的共同注意行動(指さし理解、視線追従等)、乳児と他者が接近し対象を直接使って関わるモノやりとり行動(提示・手渡し)、自ら注意対象へ他者を巻き込もうと働きかける自発的共同注意行動(要求・叙述の指さし産出等)、他者の意図を理解し自らの行動を調節する協調的共同注意行動(応答の指さし産出)の4段階を推定している。そして、さらにこれらの結果をもとに、臨床的適応を目的として、共同注意発達評価法の開発の試み(黒木・税田・田中・大神, 2003)や言語獲得との関連などを検討している(税田・田中・黒木・大神, 2003)。

常田 (2003) は、子ども側だけでなく、共同で、ある対象に注意を向けているはずの大人にも注意を向け、養育者と子どもとの二者システムとして共同注意の発達の变化を検討している。一組の母子を子どもが2ヶ月から2歳まで、自宅で1～2週おきに1回あたり約1時間、母子が遊んでいる場面を観察している。その観察データから共同注意に関連したエピソードを抽出し、共同注意を達成しようとする子ども－養育者システムにおいて発達早期には空間的・時間的拘束が存在すること、養育者はこのシステムの拘束をカバーする形で発達早期から共同注意を成立させているということ、発達に伴って、共同注意の成立に関して子どもが担う役割が増加し、養育者が担う役割は減少することを示唆している。

また、上記のような視覚的な共同注意ではなく、聴覚的な共同注意を検討しようとする試みも見られる(矢藤, 2003)。

いずれの共同注意においても、共同注意がいつ頃からどのようなプロセスで発達していくのかという視点だけ

でなく、どのようにして達成されていくのかを解明していく上では、共同に参加する子ども－養育者の相互影響を考慮した検討が重要であろう。なお、乳児における物や心の世界の認識に関しては、旦(2003)および山口(2003)に詳しくレビューされている。

③ 「心の理論」の発達

他者の心の理解の一側面である心の理論研究は、チンパンジーの他者理解研究から端を発し、欧米においては1980年代半ば頃から、日本においても1990年頃から、一つの流行のような研究テーマとなってきたといっても過言ではないだろう。心の理論に関連する研究は、今年度に限っては学会誌掲載論文はなく、大会発表においていくつみられるのみであった。しかし、研究内容としては、表象としての「心の理論」研究から、他者とのやりとりの中での心の理論としての位置づけが徐々になされてきているように思う。

木下(2003)は、心の理論の獲得が遅れると見られてきた聴覚障害幼児と母親の、過去の出来事や内的状態など目に見えない不在のものを巡る対話の分析を行い、心の理論の獲得に影響を及ぼす要因の検討に着手している。また、自己調整機能との関連(鈴木・子安, 2003)や対人葛藤場面における意図の理解などとの関連(鈴木・子安・安, 2002)で、心の理論の発達を検討している研究もある。

「心の理論」という非常に興味をそそるテーマ名でありながら、当初の研究では頭の中の「表象」や「理論」としてのみ扱われており、対象である生きた「他者」や「自己」の存在が見えないもどかしさを感じてきた。頭の中の表象を越え、現実の他者とのかかわりの中での心の理論研究の今後の発展を期待したい。

④ 他者の内的特性の理解

人一般ではなく、特定他者に対する内的特性の理解は、いつ頃からどのようになされていくのだろうか。

松永(2002)は、幼児が他者の行動から自発的に他者の行動を予測したり内的特性を推測したりするのか、また、幼児が他者の内的特性をどのように把握しているのかについて、3～6歳児を対象に実験的手続を用いて検討している。いつもポジティブな行動を示す人物といつもネガティブな行動を示す人物が登場する動画を作成し、それを二人一組で視聴させ、視聴時の幼児たちの自発的会話を分析している。その結果、3歳児でも自発的に他者の行動を予測したり、内的特性を推測したりしているであろうことを示唆している。また、いつもポジティブな行動(分与行動)を示す人物が、別の場面でネガティブな行動を示す動画、または、ポジティブな行動ではあるが別の行動(慰め行動)を示す動画を見せ、また、ネガティブな行動を示す人物においても同種の変化のある動画を

見せ、初めに見た動画との相異について質問している。その結果、同方向の行動であれば違いを指摘せず、異なる方向の行動を示した時のみ相異を指摘することを示し、幼児が他者の行動をポジティブ／ネガティブといった両極で捉え、それに基づいて他者の内的特性を把握していくであろうことを示唆している。

野田・無藤(2003)は、日常をともにする実在の他者との関係性が特性理解にとって重要であるという視点から、実際の友だちとの関係の中で、相手の特性をどのように捉えているかを検討している。幼稚園年中児を対象に、よく一緒に遊ぶ子とそうでない子に対する特性の捉えの違いをインタビューにより調べ、よく一緒に遊ぶ友だちに対してそうでない友だちよりも特性を多面的に捉えている傾向があるなど、関係性によって特性についての捉えが異なる可能性を示唆している。

毛利・古川・寺元・船津(2003)は、関係性によって友だちの行動予測に違いがあるかを発達の的に検討している。保育園の年少児・年中児・年長児に日頃よく一緒に遊んでいる友だちとそうでない友だちについて、おもちゃの貸与場面などの行動予測をインタビューにより尋ねている。その結果、年中児頃から、よく一緒に遊ぶ子とそうでない子に対する行動予測の違いが見られ始めることを示唆している。

他者の内的特性の捉えも、実際の他者との関係性の中で形成されていくであろう。そして、それは、自分自身の特性の捉えとも関連しているであろう。他者の内的特性をどのように捉えているかだけでなく、相互作用の中で、どのように互いの内的特性の捉えが形成されていくのかを検討していくことも必要であろう。つまり、内的特性の理解の発達の様相だけでなく、その発達のメカニズムに迫る研究が待たれる。

⑤ 自己の発達

自分のことを自分の名前や相性で呼んだり、「わたし」や「ぼく」という一人称代名詞で呼んだりすることは、自我意識の発達との関連の中で捉えられてきた(Wallon, 1956/1983)。

西川(2003a)は、子どもが使用する自称詞について、場面に応じた使い分けと性差に着目して、保育園に通う子どもの家庭へアンケートおよび5歳児クラスの観察を通しての調査を行っている。その結果、2歳以降になるとほとんどの子どもが自称詞(愛称や名前)を用いること、その後、男児は幼児期において両親には「愛称・名前」、友だちに「オレ」を用いる傾向があり、児童期中頃になると両親に「ぼく」、友だちに「オレ」を用いる傾向が示されている。また、男児は保育者に対して主張したり自慢したりする場面においてのみ「オレ」を、それ以外日常

的には「ぼく」を使用し、友だちに対してはどの場面でも「オレ」を使用するなど、一人称の使用が相手や状況に応じて、また、伝えたい内容に応じて選択されているであろうことが示唆されている。しかし、女兒においては学童期になって「わたし」の使用が増加するが、「愛称・名前」の使用が学童期にも続き、両親と友だち間での使い分けはほとんど見られていない。

子どもたちが性別に応じてそれぞれ使用可能な自称詞を使い分けながら、自己表現を試みる様相をいっそう具体的な生活場面から捉えていくことが今後の課題であると著者（西川）が述べているように、このような違いが、社会的なかかわりの中でどのように文化的・社会的に相互に影響を受けながらなされていくのか興味深い。また、西川（2003b）は、相手や状況においてその使用が選択される「ぼく」や「オレ」の一人称の使用が、クラスというごく小さい所属集団の中でも規定されうるものであることを報告している。

IV. おわりに

この1年間の日本における社会情動的発達研究を振り返ると、坂上（2002）の研究に代表されるように、日常生活という場の中で、他者との関係性を通して発達する子どもの姿を生きたまま捉え、それを対象化し、子どもの発達を解明しようとする視点が着実に根ざしてきているように思う。特に、社会情動的発達だけでなく、記憶が他者とのかかわりの中でいかに生み出されていくかを詳細に分析した研究（山本ら、2003）がなされるなど、様々な側面における発達を、子ども個人の頭の中でなされていくものではなく、他者との関係性の中でなされていくものとして捉えた視点での研究がかなり浸透してきたように思う。と同時に、研究者間で、関係性の捉えが曖昧になっているようにも思える。発達における関係性とは何かをあらためて考える時期なのかもしれない。

最後に、方法論に目をむけた研究を紹介したい。発達心理学の分野では、関与観察（participant observation）の重要性は以前から指摘され、その方法論も積み重ねられてきている（箕浦、1999）。その中で、石野（2003）は、観察者自身のありように焦点をあて、保育の場での関与観察者の存在のありようを明らかにし、その場での子どもの育ちを捉える可能性を探っている。保育の場での関与的観察を行うことの意義を、子どもと保育者の観点到寄り添うかたちで、子どもの育ちの実情を捉えようとする点と捉えている。著者（石野）は保育園で0～1歳時より6年間にわたって週に1回程度、保育に参加しながら縦断的に観察を行っている。そして、そこでの観察事例の自己記述を通して、保育の場で生きる「一人の人間」として

の関与観察者の存在は多様で、その都度の場の流れに応じた「子ども－保育者－観察者」関係の中で生きられるものであるとしている。そして、その特性として、関与観察者は保育の場の内部と外部の両極に位置する存在ではなくその連続帯に存在し、この存在の多様性を利することで初めて複雑で奥行きのある個々具体の出来事の意味を読み解くことができ、その結果、手応えのあるかたちで、その場での子どもの育ちの実情を捉える可能性が開かれると述べている。

このような関与観察における観察者のありように焦点を向けることは、関与観察法に対する論考であると同時に、研究者自身の立場を対象化し、そのありようを自覚化することでもあると考えられる。また、子どもを見る目として、砂上（2003）や刑部（2003）もそれぞれの保育の場における研究者自身の視点について論じており、各研究者が、それぞれの視点で、その場に生きる子どもの姿を捉えようとしている姿勢が窺える。今回、この原稿を執筆するにあたり多くの研究に触れた。残念ながら紙面の都合で取り上げることはできなかったが、社会情動的発達関連に限っても、研究テーマは幅広く多様で、その研究目的も様々であることをあらためて実感した。そして、それぞれの研究目的の解明のために、研究方法を工夫している様子も窺えた。しかし、一つの方法で明らかにできることには限りがあり、当然、扱いきれない側面が残るであろう。それゆえ、次への研究に向けて、使用した研究方法で、何が捉えられ、何が捉えられていないかを常に顧みることが大切であろう。そして、それは、研究者自身の研究の場における存在のありようや子どもを見る目を対象化し、自覚化することにもつながるであろう。また、それは関与観察に限らず、斉藤（2000）が論考しているようにビデオという間接的道具を使用した観察においても同様であろう。さらに、それは観察という方法においてだけでなく、面接法を用いた場合においても、関係性を視点に入れるのならば、研究者は子どもと対話する中で、子どもと共に何かを生み出す存在であるゆえ、常に自分自身のありようを自覚化することが必要性であろう。今回、この原稿を執筆する中で、発達研究における方法論のさらなる考究の必要性を感じた。

引用文献

- 麻生 武 1994 研究者から見たわが国の乳幼児発達研究のフロンティア 教育心理学年報, 33, 39-52.
Coie, J. D., Dodge, K. A., & Kupersmidt, J. B. 1996 仲間集団行動と仲間内地位 子どもと仲間の心理学—友だちを拒否するところ—(山崎 晃・中澤 潤 監訳) 北大路書房 Pp14-62. (1990 Peer group

- behavior and social status. In S. R. Asher., & J. D. Coie. (Eds.) *Peer rejection in childhood*. New York: Cambridge University Press. Pp.17-59.)
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. 1995 Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, **66**, 710-722.
- 旦 直子 2003 乳児における物, 心, 数の理解 児童心理学の進歩2003年版 金子書房, 119-146.
- 遠藤利彦 1998 関係性と子どもの社会情緒的発達—日本の乳幼児研究の1年を振り返る— 教育心理学年報, **37**, 37-54.
- 刑部育子 1993 学びと育ちの相互作用 ミネルヴァ書房 発達, **95**, **24**, 26-33.
- 濱崎裕美 2003 子どもの自己主張的なふるまいはどのようにして生ずるのか?—母親との遊び場面における乳児の拒否行動を中心としたやりとりから— 日本発達心理学会第14回大会発表論文集, 393.
- 畠山美穂・山崎 晃 2002 自由遊び場面における幼児の攻撃行動の観察研究: 攻撃のタイプと性・仲間グループ内地位との関連 発達心理学研究, **13**, **3**, 252-260.
- 畠山美穂・磯部美良・越中康治・蔡 佳玲 2003 幼児の関係性攻撃による被害者の行動特徴 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 465.
- 本郷一夫・杉村僚子・高橋千枝 2003 幼児の仲間関係の形成における「身体接触」の役割 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 322.
- 飯島婦佐子 1987 日本の乳幼児研究の流れ 教育心理学年報, **26**, 49-58.
- 石野秀明 2003 関与観察者の多様な存在のありよう: 保育の場での子どもの「育ち」を捉える可能性を探り当てる試み 発達心理学研究, **14**, **1**, 51-63.
- 磯部美良・佐藤正二 2003 幼児の関係性攻撃と社会的スキル 教育心理学研究, **51**, 13-21.
- 磯部美良 2003 関係性攻撃を示す女児の仲間関係の特徴 日本発達心理学会第14回大会発表論文集, 406.
- 岩立京子 2002 乳幼児期の社会情動的発達研究の動向 教育心理学年報, **41**, 42-52.
- 金 敬愛・仲真紀子 2002 中国人親子による出来事の対話: 母親と父親は幼児の出来事の語りをどのように引き出すか 発達心理学研究, **13**, **3**, 274-283.
- 神谷哲司 2002 乳児の泣き声に対する父親の認知 発達心理学研究, **13**, **3**, 284-294.
- 姜 信善 2003 幼児の仲間に対するコミュニケーション・スキルと社会的行動特徴との関係 心理学研究, **73**, **6**, 449-456.
- 桂田恵美子 2003 幼児の気質・愛着・攻撃性と母親のストレス・養育行動 日本発達心理学会第14回大会発表論文集, 402.
- 川田 学・川田 暁子・塚田 みちる 2003 初期negativismの発達と養育者の対処行動の変容 日本発達心理学会第14回大会発表論文集, 270.
- 木下孝司 2003 「過去」に関する聴覚障害幼児と母親の対話 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 108.
- 小林 真 2003 幼児の日常生活におけるストレス対処行動 日本発達心理学会第14回大会発表論文集, 268.
- Kosugi, D., & Fujita, K. 2002 How do 8-month-old infants recognize causality in object motion and that in human action? *Japanese Psychological Research*, **44**, **2**, 66-78.
- Kosugi, D., Ishida, H., & Fujita, K. 2003 10-month-old infants' inference of invisible agent: Distinction in causality between object motion and human action. *Japanese Psychological Research*, **45**, **1**, 15-24.
- 黒木美紗・税田慶昭・田中信利・大神英裕 2003 共同注意行動の発達に関する研究(2)—共同注意発達評価法の開発— 日本発達心理学会第14回大会発表論文集, 13.
- 久世妙子 1995 最近1年間の乳幼児研究の主な動向 教育心理学年報, **34**, 34-42.
- 松永あけみ 2002 幼児は他者の内的特性をどのようにとらえるのか 発達心理学研究, **13**, **2**, 168-177.
- Meins, E. 1997 *Security of attachment and the social development of cognition*. Psychology Press.
- 箕浦康子(編) 1999 フィールドワークの技法と実際: マイクロ・エスノグラフィー入門 ミネルヴァ書房
- 宮塚江里 2003 幼稚園児における幼児のストレス反応に関する研究—幼児用ストレス反応尺度の項目収集— 日本発達心理学会第14回大会発表論文集, 18.
- 毛利真紀・古川美咲・寺本敦志・船津千寿 2003 幼児における友だちの行動予測—関係性を考慮した予測の検討— 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 349.
- 森田洋子 2003 幼児における他者のネガティブな情動表出への対処 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 15.
- 中島 誠 1986 乳幼児期に関する発達心理学的研究の最近の動向と今後の課題 教育心理学年報, **27**, 35-43.
- 西川由紀子 2003a 子どもの自称詞の使い分け: 「オレ」という自称詞に着目して 発達心理学研究, **14**, **1**, 25-38.
- 西川由紀子 2003b クラス文化に規定された自称詞の

- 使い分け：「オレって言ったらヒゲが生えるんやで」
日本教育心理学会第45回総会発表論文集，221.
- 野田淳子・無藤 隆 2003 幼児における人格特性の理解(3)一関係性に依じて，相手の特性をどう捉えるか—
日本発達心理学会第14回大会発表論文集，405.
- 野口隆子・無藤 隆 2003 保育者の暗黙理論と実践行動—3歳児における拒否発生場面の分析— 日本発達心理学会第14回大会発表論文集，72.
- 小花和 Wright 尚子 2003 幼稚園児のレジリエンスに関する教諭と母親の評価—幼児の意識との比較— 日本教育心理学会第45回総会発表論文集，663.
- 荻野美佐子 2003 乳幼児期の運動・認知・言語発達の動向 教育心理学年報，**42**，46-56.
- 岡本依子・菅野幸恵・根ヶ山光一 2003 胎動に対する語りにみられる妊娠期の主観的な母子関係：胎動日記における胎児への意味づけ 発達心理学研究，**14**，**1**，64-76.
- 尾崎康子 2003 愛着と気質が母子分離に及ぼす影響—2，3歳児集団の継続的観察による検討— 教育心理学研究，**51**，96-104.
- 税田慶昭・田中信利・黒木美沙・大神英裕 2003 共同注意行動の発達に関する研究(3)—共同注意行動の獲得と言語発達との関連— 日本発達心理学会第14回大会発表論文集，14.
- 斉藤こずゑ 2000 撮影現場—映像—共同視聴の会話：発達研究におけるビデオ映像の間テキスト性 國學院大學 教育学研究室紀要，**35**，20-55.
- 坂上裕子 2002 歩行開始期における母子の葛藤的やりとりの発達の变化：一母子における共変化過程の検討 発達心理学研究，**13**，**3**，261-273.
- 佐々木宏子 1992 発達研究の転換をめざして—数の大きさ(多数決)できまる発達法則の「普遍性」は，誰を喜ばせるのか— 教育心理学年報，**31**，40-49.
- 篠原郁子・遠藤利彦 2003a 母親による乳児の主観的状态の読みとり—mind-mindedness 測度開発の試み— 日本発達心理学会第14回大会発表論文集，121.
- 篠原郁子・遠藤利彦 2003b 養育者による乳児の主観的状态の読みとりと相互作用の在り方について①—言語的関わりとの関連性の検討— 日本教育心理学会第45回総会発表論文集，347.
- 園田菜摘 2000 乳幼児期の社会情緒的な発達—この1年のわが国の研究動向を探る— 教育心理学年報，**39**，42-50.
- 砂上史子 2003 ていねいに見ること，書くこと，伝えること ミネルヴァ書房 発達，**95**，**24**，18-25.
- 鈴木亜由美・子安増生・安 寧 2002 幼児の対人葛藤場面における意図の理解と社会的問題解決能力の発達—「心の理論」との関連から— 日本心理学会第66回大会発表論文集，1010.
- 鈴木亜由美・子安増生 2003 幼児の自己調整機能と「心の理論」の発達 日本発達心理学会第14回大会発表論文集，260.
- 高橋道子 1997 わが国の最近1年間における乳幼児研究の動向—情動および関係性を視点にもつ研究を中心として— 教育心理学年報，**36**，51-63.
- 高辻千恵 2002 幼児の園生活におけるレジリエンス—尺度の作成と対人葛藤場面への反応による妥当性の検討— 教育心理学研究，**50**，427-435.
- 田中信利・黒木美紗・税田慶昭・大神英裕 2003 共同注意行動の発達に関する研究(1)—通過率から見た出現時期— 日本発達心理学会第14回大会発表論文集，12.
- 礪波朋子・三好 史・麻生 武 2002 幼児同士の共同意思決定場面における対話の構造 発達心理学研究，**13**，**2**，158-167.
- 礪波朋子 2003 幼児同士の共同意思決定パターンの分析 日本発達心理学会第14回大会発表論文集，416.
- 外山紀子 2003 食事場面への母子の共同的な参加 日本発達心理学会第14回大会発表論文集，412.
- 常田美穂 2003 共同注意の達成における養育者の役割の発達の变化—ダイナミックシステムズの視点から— 日本発達心理学会第14回大会発表論文集，262.
- 山田洋子 1986 モデル構成をめざす現場心理学の方法論 愛知淑徳短期大学研究紀要，**25**，31-50.
- 山口真美 2003 赤ちゃんは顔をよむ 紀伊国屋書店
- 山川賀世子・高橋恵子 2002 幼児の愛着の測定—図版による測定の検討— 日本心理学会第66回大会発表論文集，999.
- 山本登志哉・脇中 洋・齋藤憲一郎・高岡昌子・高木光太郎 2003 生み出された物語 北大路書房
- 矢藤優子 2003 聴覚的な注意の共有のための方略—幼児と成人の比較— 日本発達心理学会第14回大会発表論文集，264.
- 由井久枝 2002 幼児の物語理解に影響する要因—作動記憶容量と意図情報の役割に注目して— 教育心理学研究，**50**，421-426.
- Wallon, H. 1983 身体・自我・社会(浜田寿美男，訳編) ミネルヴァ書房 (Wallon, H. 1956 *Niveaux et fluctuations du moi. L'Evolution psychiatrique. I.*)
- Wenar, C. 1982 On Negativism. *Human Development*, **25**, 1-23.